「東山往来」などを先駆とし、書簡文の模範文例であったが、中世以降は教科書的なものとなり「尺素〔せきそ〕往来」「庭訓〔ていきん〕往来」など庶民教育に重要な意義をもつものが現われた。

注(10)「傾城仏の原」の通称。近松門左衛門作、上方元禄歌舞伎の代表作の一。元禄１２年〔１６９９〕正月京都万太夫座初演。

注(11) 林鵞峰著。 慶長３年秀吉病気の事から寛文１１年に至る歴史的事実、典故等を記した書。林鵞峰は林羅山の３男、両兄早世のため家督を継ぐ。本名恕、一名春勝、字は春斎。号は鵞峰のほか向陽軒、葵軒・桜峰など２０に近い。夙に家学を受け、強記博学、経史子集殆ど精通しないものはなかった。父に従って江戸に出て家光に謁し、以来、その下問に応じ、編書に従事、また諸生を教授して名声あり、来り学ぶ者多く、当時の儒宗と称せられた。延宝８年〔１６８０〕歿、６３才。著に「本朝通鑑」をはじめ、詩１万首余、文は２千編を越えた。

注(12) 有職故実の随筆。伊勢貞丈が宝暦１３年〔１７６３〕正月１１日書き始め、天保１４年〔１８４３〕６月、貞丈の孫貞友と千賀春樹等が浄書校正し、１６巻３２冊として出版した。伊勢貞丈は安斎と号し、有職故実家として有名だった幕臣。天明４年〔１７８４〕歿、７０才。その著書数十種数百巻に上る。

資料　全国方言辞典（東条　操編）
大言海（大槻文彦）
仙台の方言（土井八枝）
仙台方言考（真山青果、「真山青果全集第１５巻、新版全集第１７巻の内）
方言（藤原　勉、「宮城県史」２０の内）
岩手方言集（小松代融一）
大辞典（平凡社編）

117　日本橋の下の水

問　「鐘と狼火と」(木村　毅）に『日本橋下をながれている水が、はるかにロンドンまで通じている……』、また、竜雲院の案内板に『…日本橋の下の水はロンドンのテームズ河に通ず……』とありますが、林子平の何の著書にあることばでしょうか。

答　お尋ねの語句は、林子平著「海国兵談」第１巻に、『竊に憶へば当時長崎に厳重に石火矢の備有て、却て安房、相模の海港に其備なし、(1)此事甚不審（いぶかし）。細かに思へば江戸の日本橋より(2)

唐〔から〕、阿蘭陀〔オランダ〕迄境なしの水路也。(3) 然るを此〔こゝ〕に不レ備して長崎にのみ備るは何ぞや。小子が見を以てせば安房、相模の両国に諸侯を置て、入海の瀬戸に厳重の備を設け度事也。日本の惣海岸に備る事は、先此港口を以て始と為べし。是海国武備の中の又肝要なる所也。然と云とも忌諱を不レ顧して有の儘に言うは不敬也。不レ言は亦不忠也。此故に独夫、罪を不レ憚して以て書す。』とある中のアンダーラインの部分をもじったものです。それは、先覚的な子平を崇拝する余り、多分に文芸的修飾や誇張に過ぎた後人の作為です。このような変形には幾通りもあり、しかも、そのような形で人口に膾炙している場合が多いので、下にそれらのものを挙げて置きます。

1.「林子平伝記」（鈴木省三）の内。伊藤博文

『昇平三百年　人皆高枕眠　借問海内士　著眼誰最先　日本橋頭水　直連龍動天(4)　辺防豈可怠　巨艦非漁船　精神豈如在　確言千古伝　我来弔墳墓　懐古涙潸然』

2.　「増補六無斎遺草」（林次郎）の内。伊藤博文

『昇平三百年　人皆高枕眠　借問海内士　着眼誰最先　日本橋頭水　直接鄂羅天(5)（下略）』

3.　「増補六無斎遺草」（林次郎）の内。口絵図版、伊藤博文

『昇平三百年　挙世高枕眠　借問海内士　着眼誰最先　日本橋頭水　直接鄂羅天（下略）』

4.　「仙台案内」（庄子輝光編）

『江戸の日本橋より欧羅巴洲に至るの間は一水路にして……』

5.　「天保十三年壬寅三月、林子平五十年忌辰詩以祭之」（斎藤竹堂）

『海水連天白渺茫　誰知此外更有大西洋　欲与之語鄂羅英吉利(6)　一聞驚絶皆卻狂』

6.　「北方史入門」（吉田武三）

『……彼に、このなかの一句が「日本橋の下の水は倫敦〔ロンドン〕に通ず」と変形されて、明治初期まで志士や進歩的知識人の流行語となった。』

7.　「林子平伝」（斎藤竹堂）

『我環国皆海。近自日本橋。到鄂羅斯阿蘭陀。同一水路。無有阻隔……』

8.　「奥羽御巡幸明細日誌」（大塚禹吉実は岸田吟香編、「明治天皇聖蹟志」（宮城県）の内）

『我日本国は環皆海(7)にて、凡そ日本橋より欧羅巴まで、其間一水路にして阻隔ある事なし……』

9.　「六無草遺草」の内、「林子平」（関機）『江戸日本橋、抵於欧羅巴列国水路相通……』

10.　「教育者として林子平先生を論ず」（秋鹿見橘）

『……日本橋頭、水直にロンドンの天に連り……』

11.　「林子平先生小伝」（河合文応・伊勢斎助共編）

『我国四方海、江戸日本橋より欧米に至る、同一水路にして阻隔あるなし…』

12.　「林子平先生を讃ふ」（土井晩翠、仙台市公報号外、昭和17. 12. 8）

『(1)千古空しき海国の

守りし道を独り見て

世を警めし大獅子吼
日本橋の下の水
四海に通ふ思はずや。』

注(1) 「海国兵談」は僅か３８部世に出ただけで国禁の書となった。幕末海防が焦眉の急を告げると、この書を喝望する者多く、嘉永４年〔１８５１〕松下淳校正の木活字１０冊本の「精校海国兵談」が現われた。精校と銘打つが、伝写本を底本とした書で、多くの誤まりを含んでいる。この版をもとにして、安政３年〔１８５６〕水戸の安積五郎が「稟準精校海国兵談」５冊本を刊行した。校訂というより寧ろ加筆であって、原本と比較すると甚だ変容したものになっている。明治１５年大槻修二〔如電〕編「六無斎全書」（同求社）に、序文と水戦を載せている。大正５年図南社発行の「海国兵談」は誤まりが少ない。仙台の伊勢斎助がこの版を昭和３年「増補六無斎全書」の内に収めて裳華房から発行している。岩波文庫本「海国兵談」〔絶版〕は村岡典嗣の校訂で最も精校である。住田正一編「日本海防史料叢書」第１巻（東洋堂、昭和１８年）同年の生活社版「林子平全集」第１巻にも収められている。最近のものとしては、生活社版全集を底本とした昭和５４年発行第一書房版「新編林子平全集」第１巻に収録されている。特に、研究者にとって裨益するところ著大なのは、東北大学附属図書館所蔵原本の影印復刻版が昭和５２年に公刊されたことである。（仙台宝文堂発行）

注(2) いしびや。 徳川時代初期頃西洋伝来の大砲を称した。子平は他の個所では、大銃、大筒〔おおづつ〕の用語を用いている。

注(3) 「郷土誌漫筆」（阿刀田令造）に『……「日本橋の水とテームズ河の水とつながっている」とは、子平先生はどこにも書いてゐません。之に似た文字は兵談水戦上の江戸日本橋より唐土及阿蘭陀までも境なしの水路なりであります。』。「時代的制約の見本」（杉浦明平、「新編林子平全集」月報３の内）に『……「江戸の水は倫敦（ロンドン）に通ず」というような一句以外に印象に残っていない。……敗戦後…「林子平全集」第１巻を読んで…「細かに思へば江戸の日本橋より唐、阿蘭陀まで境なしの水路也」という一節もあった。「江戸の水は倫敦に通ず」というわたしの古い記憶はここから出ていたのだろう。大よそは似ているが、実物に当ってみなければならぬという教訓だった。』とある。

注(4) 龍動、ロンドンの音〔中国現代音〕訳。

注(5) 鄂羅、Ｒｕｓｓｉａの音訳。オロシアの音訳鄂羅斯の斯の１字を省いた語。斡羅思、俄羅斯、阿羅斯とも音訳した。

注(6) 英吉利、 イギリスの音訳。

注(7) 明治９年６月２日東京を御出発、東北地方を御巡幸、７月２２日海路帰京された。その時の行幸には、６月２０日本県（当時磐前〔いわさき〕県）越河村に入られ、仙台御着が２４日、３０日仙台御発、７月３日有壁村を過ぎ岩手県に入られた。供奉して来た木戸孝允が、

仙台到着の２４日午後林子平墓に詣でている。２９日には明治天皇が、子平への褒詞に添えて祭粢料を下賜された。林子平が世に顕彰されるのはこの時からである。

資料　海国兵談（林　子平）

118　伊達政宗が藤次郎と称したのは何故か

問　伊達政宗は輝宗の長男であるのに、藤次郎(1)と称したのは何故ですか。

答　わが国には、古くから中国流の排行〔輩行、はいこう〕によって、兄弟の年齢順に長兄を太郎、次男を二郎（次郎）、三男を三郎……と称呼する慣行があります。ところが、伊達政宗は輝宗の長男ですから太郎と呼ぶべきにもかかわらず、藤次郎と称しました。この事実が、「性山〔しょうざん〕公治家記録」巻之３に、次のように記されています。

『〔天正五年〕○十一月壬子小十五日戊辰。米沢城ニ於テ嗣君御元服、藤次郎ト称シ政宗ト名ツケ給フ。……時ニ御年十一歳。』

その理由については、次の諸書がこれを記しています。

1.　「伊達正統世次考」巻之１下（伊達綱村撰）

『当家念西〔ねんさい〕公以来。四代相次。皆以次男承家。当有不得已之由然焉耳。後世不由於長幼昆季之次第。総称次郎。蓋亦職之由乎。』

2.　「性山公治家記録」巻之１（「伊達治家記録」１（平　重道編）の内）

『性山公

公御諱〔いみな〕ハ輝宗、御童名ハ彦太郎、後総次郎ト称ス。……

御代々次郎ト称シ、中古ヨリ互ニ藤次郎・総次郎ト称シ給フ。然レトモ多クハ略シテ次郎ト称ス。』

3.　「伊達治家記録」１（平　重道編）の内「性山公治家記録」巻之１の編者頭注

『伊達家譜によると２代宗村(2)は伊達次郎、３代義広(3)は粟野次郎、４代政依(4)は伊達次郎、１４代稙宗、１５代晴宗は次郎と称し、１６代輝宗は総次郎、１７代政宗は藤次郎と称した。宗村から政依まで次男で家(5)を嗣いだので、嫡子にも次郎と名付けたのである。』〔始祖朝宗から〕

4.　「伊達政宗」（小林清治）

『天正５年〔１５７７〕１１月１５日、１１才の梵天丸は元服して藤次郎政宗と称した。藤次郎は、次郎および総次郎の称とならんで、伊達累代が襲名してきたものである。』